

---

# 代！天！楽

こさけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

代！天！楽

### 【Nコード】

N3759I

### 【作者名】

こやけ

### 【あらすじ】

愛馬と執事を連れ、奴隷市場で女の子の奴隷を買った貴族の少女。その目的は、奴隷ではなく使用人としてだった。優しい主人にメロメロになる女の子と、仕事ぶりの良い老執事。彼らに従えるカルデアの、二転三転する生活の日々を描く。

## 1話 - 郷に入れたら業は無視しろ（前書き）

前書きは基本的に書かないことにしていますが、最初だけ。

前々作『Promises』を投稿しましたため、次回投稿のために新作を書き始めました。

といっても作品の方向性はあまり定まっておらず、感想などでご協力いただければ嬉しいところであります。

中世イギリスでは普通に存在したはずなのに『メイド』と書くとは変な目で見られかねない世の中です。私は『使用人』と書きますので、本来の姿のメイドだと思ってくださいませ。

それでは、お楽しみください。

## 1話 - 郷に入れたら業は無視しろ

『普通』という言葉には、様々な捉え方がある。

一人にとつては良くてももう一人にとつては悪かったり、一人にとつては正しくてももう一人にとつては悪しきことだったりする。それが意味するところは人によって違う。

その中でただ一つ、価値観を束ねるものがあるとするれば、それは時代。風潮。

時代が是と云えば悪も是となり、おかしいとすら感じなくなってしまうもの。

とある国の大広場でも、他の時代では許されなだらう行為が平然と行われていた。

「お次は、本日唯一の女奴隷だよ！ さあ入札はいないかね！？」  
中央の台座には、鎖付きの首輪を着けられた少女が悲しげに立っていた。

髪型はボブカットを少し長めにしたような感じで、色は青に近い水色。顔や姿は標準より可愛い方だろう。健康状態も良さそうで、しかしそれらの良い点全てが彼女の不安と苦しみに打ち消されていた。奴隷に着せられるボロの服が、また一つイメージを悪くしている。彼女の隣でがっしりと鎖を掴んでいる男は、奴隷商人。一声あがる度に吊り上がる利益を数え、いやらしい笑みを抑えきれずにその場を仕切っている。

「十万ギネア！ 十万だよ！ これ以上はいないかね！？」

提示された値段はそこその値段。高すぎるかといえばそうではなく、奴隷の価値観といえは所詮その程度といえた。使い捨て感覚で飼い、用無しになれば放る。事実、それがこの時代における『普通』なのだ。次代に流され、奴隷自身もその運命を受け入れている。

「二十万よ！」

そんな奴隷の少女の顔をがばっと上げさせた、喧騒の中の美しい声。

奴隷市場の購入者達は老若男女が揃っていたが、流石に最年少であるう少女だったのである。彼女は見たところ十六歳から十七歳くらいで、誰よりも清楚な出で立ちをしていた。

さらりとした金色の髪を風になびかせ、意志の強そうな青い瞳は、奴隷の少女だけをじっと見据えている。肌は白く、身体は細い。それら全てを一言で言うなら、美麗。

奴隷の少女は感動した。表情を変えぬよう堪えながら、心の中で感動した。まさしく女神様が救ってくださったのだと。

「えー、二十万。二十万以上の方はおりませんか？」

ハツと我に返った商人が尋ねるが、それ以上の声が上がらない。落札が決定した。

「ファクト、払ってきて頂戴」

「かしこまりました」

彼女の一言で歩き出す老人。外見は確かに年老いているが、背筋はピンと伸びていて、雰囲気からも衰えは感じさせない。ファクトと呼ばれた老人は商人に代金を手渡し、観衆の注目を集めながら首輪の鍵と奴隷の少女を受け取った。

「では、来なさい」

「は、はい」

ファクトの声に従い、後ろをついていく。購入者の少女と合流すると、三人はそのまま歩き出した。彼女らの背中に誰もが注目する中、奴隷商人が一際大きな声を上げた。

「さあ、お次は」

全員が振り返り、胸を撫で下ろす奴隷商人。市場は再度の盛り上がりを見せていた。

一方、目的を達した二人は、奴隷の少女を連れて帰路に着いていた。

彼女を買った少女は純白の、たてがみは輝くような金色をしたポニ

ーに乗り、ファクトが馬を引いている。奴隷の少女は隣を歩いているが、気まずさ故か言葉が出ない。ファクト達も話しかけようとはしなかった。

そうこうするうちに彼女らの邸宅に着き、奴隷の少女は思わず息を飲んだ。

「どうしたのよ。話があるから、早く入りなさい」

「は、はいっ！ 失礼します！」

初めて声をかけられる。彼女を、つまり奴隷の少女を買った少女はポニーの頭を撫でながら笑いかけていて、自ら厩舎に連れて行くらしい。そんな様子がまた魅力的だった。

「ファクト、しばらくしたら行くわ。それまで頼むわよ」

「はい。では貴女はこちらへ」

導かれるまま、ぎくしゃくと邸内に入っていく。ひたすら無言の間。

「すごい……広いし、綺麗……」

首輪は既に解かれていて、自由に動かすことが出来る。また、見回したくなるのも当然といえる。高そうな花瓶、壁に飾られた絵画、感触の良いカーペット、二階へと続く階段、まるで全てが未知の世界。きよるきよると見回しながら、ファクトについていく。

そんな様子をちらりと見返しながらも反応は返さず、ファクトはそのまま歩いた。

そして辿り着いた一つの部屋。少女は中に通され、なんと椅子までもが用意された。

「えっ！ えッ！？ あ、あの！ 私なんか、こんな高そうな椅子を」

「カルディ様がおいでになるまで、ここでお待ちください」

彼女の言葉を打ち消すようにぺこりと頭を下げ、三步下がってその場に控える。かといって彼女を見張るような様子でもなく、懐から手帳を取り出し何やら書き入れている。

言葉はなく、無言。仕方なく、少女は今まで一番高いだろっ椅子

にゆつくりと座った。

「待たせたわね」

それから数分後、遂に彼女は訪れた。外出着から着替えたらしく、随分と質素な服装になっている。それでも奴隷である彼女から比べれば、華美そのものなのだが。

「人に名前を尋ねる時は自分から。お父様からそう聞いたわ。私はカルデイよ。貴女は？」

彼女はカルデイと名乗った。その目の前にいるのは奴隷の少女で、わかっているはずなのに対等な口調で話しかけている。困惑しながら、少女はたどたどしく答えた。

「あ、あの……ルカです。ルカ・エストウェイと申します」

「そう。よろしくね、ルカ」

それは、まるで先程の愛馬に笑いかけるかのような笑顔。奴隷である彼女を一切見下していない、カルデイがルカを対等に見ている証拠。ルカは、思わず泣き出していた。

「う、うええ……ふええええええん」

「ちょ、ちよっと！？　なんで泣くのよ！？　名乗っただけじゃない！」

がばつと彼女の肩を掴み、表情を覗き込むカルデイ。ルカはまだ泣き止まない。

「だ、だって……　奴隷として売られることが決まった時から、私是不安で……どんな酷いことをされるかと思うとずっと怖くて……」

それが私を拾ってくださった方は……お若くて綺麗で、しかもこんな優しい方で……　嬉し涙が止まりません……！！」

計算でなく、本心であることは当然わかる。それでもやはり照れ臭いのだろう。口元を隠すように手をやりながら、あえて意地悪な言葉を投げかけた。

「もう一度言うけど、名乗っただけよ。これから酷い仕打ちがあるかもしれないわ」

「いいえ。カルデイ様はそんなことはしません」

きつぱりと言い切るルカの顔を見ると、カルデイも反論する気が失せていった。

「ええ、そうね。大正解よ」

やれやれと顔を抑え、首を振る。ファクトをちらりと見ると、彼も苦笑いしていた。

それから再びルカに目を合わせると、次の言葉を待つようにちよんと座り込んでいる。

半ば呆れながら溜息をつくカルデイ。気を取り直して、言うべきことをルカに伝えた。

「反応に困るから、喜ぶのは後にしてとりあえず聞いて頂戴」

こくりと頷くルカ。それを確認し、カルデイは言葉を続けた。

「世間じゃ奴隷の扱いは随分酷いもののようにだけど、そんな非人道的なことをするつもりはないわ。それ以前に、私は貴女を奴隷だなんて思っていないの。今日奴隷市場に出かけたのだって、そろそろお手伝いさんが欲しいなと思ったから。それだけだったのよ」

「その通りです。この屋敷には私とカルデイ様の二人のみ。そこで貴女には当家の家事手伝い、平たくいえば使用人として、住み込みで働いてほしいのです」

「す、住み込みですか!？」

ファクトが割って入ったかと思えば、ルカに提示されたのはとんでもない好条件。カルデイの言葉を彼が代弁した形になったらしく、カルデイはルカの返事を待っている。

「そ、それは! あの、その!」

早く返事を返そうとするが、あまりのことに戸惑って言葉が出ない。カルデイはおかしそうにその様子を眺め、ゆっくりと返事を待っている。ルカは、遂に勇気を出して答えた。

「お、願います! カルデイ様、ファクト様、よろしく願います!」

二人は揃って仰天した。なぜなら、ルカは自ら土下座までしたのだから。

「ちょ、ちょっと！ やめなさい！ 私は身分がどうのこうのって  
いうのは嫌いなのに！」

「奴隷制において破格の扱いですからね。無理もないといえば……  
そうかもしません」

ファクトがしゃがみ、ルカを立ち上がらせる。カルデイは溜息をも  
う一つ。

「あと、様付けはいらさないから。カルデイさんでいいわ。流石に呼  
び捨てはアレだけどね」

「私はカルデイ様と呼んでおりますが、気にすることもございませ  
ん」

「えっ！？ そ、それなら！ ファクト様がそう呼びなのでした  
ら私も！」

その言葉に感心したところに、ファクトの一言でこれまた大焦りの  
ルカ。カルデイは、彼女を落ち着けるように笑いながら答えた。

「ファクトは昔からそうだもの。貴女は貴女の好きなように呼びな  
さい」

「は、はいっ！」  
それから、ファクトにちらりと目をやる。彼はひとつ頷き、くるり  
と背を向け歩き出した。

「ファクトについていきなさい。渡すものがあるの」

「はい」

カルデイの指示で、彼女と共にファクトを追うルカ。しばらくする  
と、彼の足が止まった。

「さあ、選びなさい」

開けられた扉の先にあったのは、整理整頓された多量の衣服。その  
どれもが美しい。

「選びなさいって…… え？ ど、どういうことですか？」

カルデイの言葉を耳に入れるが、理解できないまま抜けていく。ル  
カにとつても簡単な言葉なのに、予想だにできなかった意外性が理解  
を妨げる。





でカルデイに顔をすり寄せてくる。彼女が普段からどれだけ愛情を注いでいるかが見て取れた。

「このコの名前はシエラ。カマルグって種類のポニーのメスよ。小さい頃から一緒にいる、私の大好きなコなのよ」

するとシエラは、ルカのほうにぐるんと首を向けた。するとルカは、たじつと一歩後に引き、ぺこりと頭を下げたのだ。これにはカルデイも大笑いした。

「……あはははははははははっ！！」

「わ、笑わないでくださいよお。どうしたらいいかわからなくて……」

敷かれた藁葺きを踏み締め、また一歩近づくシエラ。ルカがドキドキしながら硬直していると、シエラは彼女にも顔を摺り寄せた。

「あら、早速気に入られたみたいね」

「ええ！？ 私、まだ何もしてませんよ！？」

「雰囲気わかるのよ。馬は人間よりもずっと敏感なんだから」  
感心して頷き、シエラに手を差し出すルカ。そつと撫でると、喜んでいような気がした。

「シエラも問題ないみたいだし、少し乗ってみましょうか」

ほつと一安心したかと思えば、今度はカルデイの言葉にぎよつとした。ルカは慌てて手を振り、大袈裟に否定する。

「だ、ダメです！ シエラはカルデイさんの愛馬で、私なんか乗るわけには……！」

「あら、シエラはいいって言ってるのに。むしろ早く乗せたいみたいよ」

ルカが余程舞い上がっていたのか、気がつけばカルデイはシエラを外に連れて出ていた。厩舎から慌てて飛び出し、シエラのもとに駆け寄る。

「安心して。サラブレッドじゃなくてポニーだから、女の子二人ぐらい軽いものよ」

「は、はい……」

にこりと微笑むカルデイ。その美しい笑顔に癒しを感じながら、彼女の乗り方を真似して後に続いた。

「乗り方も上手いものじゃない。あとは私に掴まっててね」

さつと掴まらないとバランスを失うため、ルカは躊躇せずにカルデイに組み付いた。だがそれはつまり、背後から抱きつく形になる。

衝撃的な出会いから、計らずも様々な魅力をルカに見せていたカルデイ。そんな彼女と密着し、ルカも思わず照れてしまう。

（良い匂い……ブロンドもとっても綺麗で……こんな完璧な人がいるんだなあ）

同性や異性を超えた、人としての憧れ。例えるなら、こうなりたいという姿に似ている。

「ちょっと、聞いてる？」

「あつ、す、すみません！」

シエラは既に闊歩を始めていた。カルデイは小さく溜息をつき、言葉を繰り返す。

「乗り心地はどうかなくて聞いたのよ。人によって合う合わないはあると思うし、そればかりは仕方ないでしょうからね」

「はい、大丈夫です」

「そう。よかった。じゃあ少しスピードを上げさせるわね」

カルデイが出す指示は鞭ではない。たてがみの辺りを手のひらで二回叩き、シエラもそれを感じ取って軽快なスピードで走り出す。

結局、二人は夕暮れまで邸内を走り回った。最初は二人で乗り、それからルカが一人で乗る練習。それがシエラとの、そしてカルデイとの交流にもなったのだった。

それからシエラの世話をカルデイから習い、餌を与えたりした。ルカもシエラにだいぶ気に入られた様子で、終わる頃にはおどおどした様子はなく、にこにここと笑っていた。

「それじゃあそろそろ食事にしましょうか。もうそろそろファクトが呼びにくる時間よ」

「はい！」

屋敷に戻ると、その言葉通りにファクトが二人を待っていた。そして彼はにこりと笑い、言った。

「さ、夕食が来ておりますぞ。お二人とも、用意が出来ましたらおいでください」

カルデイに導かれ、食事前の手洗いへと向かう。それから食堂へと向かうと、そこにはルカの想像と違うものが幾つもあった。

まず一つは、食堂の規模。ここもコンパクトにまとまっていて、大仰な広さはない。食事内容も、そのどれもが飛び抜けて美味しそうではあるものの、あくまで一般家庭に比べてだが料理の種類は多くない。どちらも無駄をなるべくカットしたようなイメージだ。そして何より、椅子が三つあるのだ。

「さ、座りなさい」

カルデイが指先で席を示す。もしやと思って、ルカは尋ねた。

「もしかして……あの席は、私の席でしょうか……？」

「当然じゃない。その隣は私で、正面はファクトよ。貴女には初めて見る料理ばかりでしょうし、食べ方はその都度教えてあげるわ」

「は、はい……っ!!」

もう歡喜に咽ぶことはしない。感謝の印を表したいならば、それは喜ぶことだと知ったからだ。ルカは、カルデイとファクトに向けて最大限の笑顔を浮かべた。

「それでいいのよ。改めてよろしくね。ルカ」

「こちらこそ……よろしくお願ひします！ カルデイさん！」

二人は微笑み合い、それを見てファクトもにこりと笑う。

ルカの過去など、もはや本人すら気にしていない。食堂はまた一段と賑やかになり、大きな盛り上がりを見せるのだった。

## 1話 - 郷に入れたら業は無視しろ（後書き）

如何だったでしょうか。

私としては苦笑しております。作品の出来にはありません。

自分が作品を思いつけば、やはり貴族というところに辿り着くのだなあと、自分の貴族好きに苦笑いです。

ちなみにタイトルですが、いつもユーロビートの曲名なので今回はジnkクスを使ってみました。

最近は、なぜだか末尾に「！」が付く作品が多いですよ。あのマークはアクセントを強める意味があり、ならばタイトルを読み上げる時には末尾を強調するのだろうか（例：  
！  
！  
っ  
！）

そんなことを思っています。一切関係なく普通に読むようです。ですがこれらの「！」作品、なぜだか大人気作品に多いんですよ。語尾に「！」がついている作品は、例外なく売れている感があります。

ですので、私も使ってみました。ただし、遊び心満載のひねくれ者なので末尾には使っていません。

『代』『天』『楽』は一つずつなので、それらを区切る意味でも。

ちなみに作品名は、アクセントの強調無しで『だいてんらく』と読みます。そうです『大転落』です（笑）

それとですね……

カルディは主人公ではありません。実はヒロインなのです。

主人公を一話に出さないというのが得意技……といえますか定例になつてきてしまいました。

それもそれで、読者さんのイメージで広げられるから面白いかもと思ったり。

では、よろしければこの作品にお付き合ってくださいませ。よろしく  
お願い致します。

続くヨ

以下ネタバレ注意（多少含みます）

さて皆さん、もしよろしければ協力して頂きたいことがございます。大丈夫です。任意ですから。

この先の展開に二つの候補がありまして、この一話を読んでくださった方はどちらが読みたいものだろうか、それを教えてほしいのです。

- 一：しばらく三人の生活の様子を描く
- 二：カルディが没落。二人と共に奴隷として同い年の少年に拾われる

## 2話 - 御嬢様も貴から落ちる

ルカがカルデイの下に使用人としてやってきてから、三ヶ月程が経った。

「カルデイさん、ただいま帰りました」

「おかえり。これからシエラの世話をするところだったのよ。一緒に来る？」

「はい！」

頼まれた買い物を買ったルカ。今やすっかり馴染んでいた。

意外なようだが、誰が奴隷だったかなど覚えていない者は一人もいない。町の住民とも笑い合うようになり、ごく普通の一般人としても楽しい日々を送っているわけだ。

そして、ルカにはカルデイに返しても返しきれぬ恩があった。それはルカを拾って優しくしてくれていることではなく、ずばり奴隷になった理由なのだ。

彼女の家は、稼ぎの少ない貧乏一家だった。もっともこの時代においてはほとんどの家がそうなのだが、その中でも特別に貧乏だったといっている。

そんな折に、奴隷として身売れば家族に大金を送ることができるということを知った。

苦悩の末に、彼女は自ら身を売る決断をした。奴隷商人に話を持ちかけ、商品として売れ次第落札額の五割を親元に送る約束をしたのだ。

結果としてカルデイがルカを買い、彼女の両親には落札額の十万ギネアが送られた。だが彼女の両親は受け取りを頑なに拒否し、奴隷商人もほとほと困り果てたという話だ。

ルカはそれを知らなかったが、違う理由で落ち込んでいた。両親は自分を心配して探しているだろうし、代金の半額が送られれば奴隷になったことが知れる。そんな思いからだ。

明るい顔で仕事をするルカだが、カルデイの目にはいつも彼女の翳りが映った。故にある日ファクトに相談し、二人でルカを問い詰めた。

遂に彼女は、どうしようもなくなつて真相を告白した。

カルデイとファクトは、彼女を叱り付けることはしない。

「ご両親に会つてきなさい」

一言だけそう言つて、ルカにお金を渡したのだ。ルカは泣いていた。数日後、旅から帰つてきたルカ。その表情からは、暗いものが完全に消え去つていた。

カルデイが話を聞いたところによると、まず事情を説明して、両親から一発ずつ殴られたらしい。それは親としての愛情ゆえであり、彼女を抱き締める両親は泣いていたそうだ。

三人ともに落ち着いてから、彼女は家族に自分の意思を伝えた。奴隸としてではなくルカとして、どうしても働きたい奉公先があるととても良い主人だと。

心の内を伝えると、母親は許可したものの父親が渋った。そんな父にルカは、カルデイから受け取った現金と同封された手紙を渡した。現金は何年も生活できる程の多額だが、ルカの両親が着目したのはそれではない。手紙だ。

その手紙は正しい礼儀に則つていて、そこにカルデイの人物を見たのだらう。父もいよいよ首を縦に振り、礼を言っておくよう娘に命じたのだった。

それからは何の問題もなく、ファクトに習つた数々の仕事を毎日こなしているルカ。買い物に行つたり、洗濯をしたり、料理をしたり、精力的に働いている。

休日も貰えるし、給料が出るから遊びにも行ける。使用人としてどこを取つても文句一つ無い、ルカにとつてもつとも充実した日々が始まつていた。

そんな楽園のような生活が続き、約一年が経った。

もはや戸惑うことはなく、十分に溶け込んでいるルカ。主人のカルデイとの仲も良い。

「カルデイさん、只今戻りましたー」

「ありがとう。お疲れ様」

買ってきたものをガサツと降ろし、ファクトを探す。だが、彼はいない。

（ファクトさん、計画通り買いに行ったみたい）

昨晚のうちに彼と交わした約束を思い浮かべ、フツと微笑む。実は、今日はカルデイの誕生日なのだ。自分からは言わないものの、カルデイだって普通の女の子。期待していないわけではない。

ファクトはケーキとシャンパンを買ってきて、ルカはいつもよりも豪華な食材を買ってくる。そして、ファクトの長年の経験を元に二人で料理を作る。計画とは、そんな計画だ。

「ただいま、ルカさん。カルデイ様はシエラのところですか？」

「はい。今日も一緒に遊んでいるみたいです」

ファクトの手には、町のケーキ屋の箱と高級そうなシャンパンの瓶。それに一通の手紙が握られていた。

「では準備を始めましょうか。すぐに参りますので、始めておいてください」

そう言つてファクトは、執事室に向かつていった。手紙が消えているのを見て、ファクト宛の手紙だったのだろうとルカは思った。

「手紙かあ……今月もそろそろ書くのかな……」

あれ以来、ルカは一ヶ月に一度手紙を書いていた。故郷の両親への手紙である。

文面からも楽しさが滲み出ているほどで、それを読むことで両親も安心していった。

そんな両親の顔を思い浮かべると、同時に思い出したのはカルデイの両親の話。

それだけは尋ねてはならないと、ファクトが口を酸っぱくして注意

しているのだ。

先手を打って封じているわけで、無論、彼はその理由もルカにしっかりと話した。

その理由とはつまり、カルデイの母は彼女が幼い時に亡くなっているのだ。そこそこの政治家であった父はシヨックを忘れるために仕事に没頭し始め、今や昇進街道まっしぐら。娘であるカルデイとも、もう何年間も会わないままらしい。

ストレートに言ってしまうえば、カルデイは寂しくて仕方がないということ。健気に、そして気丈に隠し通してはいるものの、やはり辛いのだ。毎日シエラの世話をしているのには、もしかしたらそういう気持ちの反動もあるのかもしれない。

ルカはそう思い、カルデイの両親について尋ねないことをファクトに固く誓ったのだった。

「ルカさん、お待たせしました。では作りましょうか」

「はい！」

想いに耽るうち、エプロンを着けたファクトがやってくる。材料を出し、二人で下ごしらえから取り掛かった。

数時間後、料理の数々を目の前にカルデイは絶句していた。無論、その完成度にある。

「今日はどうしたの？」

いつもよりも多い品数に疑問を投げかけられたが、ファクトはこう誤魔化した。

「ルカさんが料理を教えてほしいと申したもので、つい作りすぎてしまったのですよ。」

さあ、お召し上がりください」

「ええ。いただきわ」

下された料理の評価は、どれも最高評価。執事および使用人としてこの上ない至福である。

それからも三人だけのささやかな宴は続き、いよいよケーキとシャパンが登場した。

「十六歳のお誕生日、おめでとうございます」

「おめでとうございます、カルデイさん！」

二人が祝福する。カルデイはしばし呆然とした後、後ろを向いた。

「あ……ありがとうございます……」

声が震えていた。現在の表情は、きつと満面の笑み。その表情を確信して、ファクトとルカもにこりと笑った。

「ありがとうね、本当に」

くるっと顔を向ける、心から嬉しそうなカルデイ。ファクトとルカには一番のご褒美だ。

そんな楽しい夜は、あつという間に更けていった。

「ファクトさん、カルデイさん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ。また明日ね」

彼女自身も十分に楽しみ、自室へ戻っていくルカ。途端、ファクトの表情が急に崩れた。

「どうしたのよ、そんな深刻な顔をして。今度は顔芸でもやってくれるの？」

ふつと一息つき、ファクトの表情に疑問を浮かべる。彼は、一通の手紙を取り出した。

「言うか言うまいか悩んでおりましたが、言わねばなりません。これをお読みください」

辛そうに手紙を手渡す。彼の態度から、良い手紙でないことはカルデイも察していた。

ゆえに、差出人の名前が彼女の父であったことにも喜びはしない。

『カルデイへ』

政敵にしてやられた。汚職の容疑をかけられ、遂にそれを決定的なものにされた。私は何もしていないのに。ただ政治家としての仕事

をしていただけなのに。

この手紙が到着する頃、私は牢獄の中にいるだろう。これが検閲を通らない最後の手紙だ。次からは検閲を通ることになるし、滅多なことは書けない。だから、事実を全て説明する。

本当に申し訳ないのだが、我がファルム家はお家取り潰しとなったいきなりと思うだろうが、これが奴らのやり口だ。邪魔者は失脚だけに及ばず、そのすべてを剥奪する。

巧妙に法律に則って罰金を要求され、そしてそれは、今まで積み重ねてきた財産全てでも払えることのない額なのだ。

私ももう政界へ戻る方法は、いや、まとも生きていく方法すら残されていないかもしれない。おそらくそちらにも、手紙が届く頃には差し押さえが行っていることだろう。家を含め、奴らは全ての財産を奪うつもりだ。だから大事なものは全て隠し通しなさい。そしてお前の今後だが……すまないと思っている』

手紙はそこで途切れていた。最後のほうは字がぐちゃぐちゃになっていて、余程疲れていたのだろうということがわかる。読み終わったカルディからも、まるで言葉が出ない。

「受取人には私の名前も書かれていましたので、勝手ながらお先に読ませていただきました。旦那様はかなりお疲れのようで、おそらくそこに書かれていることも事実でしょう」

ファクトには、慰めの言葉が見つからなかった。というより、下手に慰めていいほど軽い事態ではなかったのだ。今はただ事実に対面し、対処を考えなくてはならない。

「お父様は、大変なお祝いをくださったわね」  
カルディはフツと笑った。その笑みは先程のものとは正反対で、言うなれば皮肉の笑い。

「カルディ様、これは恐らく事実であり、対処を……」

「今日はもう疲れちゃったわ。お休みなさい」

「カルディ様！」

立ち上がり、部屋に引き上げるカルディ。ファクトはその背中を止

めることが出来ず、悔しそうにしながら呟いた。

「差し押さえが来るとすれば、おそらくは明日か明後日辺りか……ひとまずカルデイ様がまともに話をお聞きにならないことには……」

それが仕事とはいえ、今日ばかりはテーブルの上を片付ける気にもなれない。ファクトはパーティーの跡をそのままにし、グツと拳を握り締めながら自らも自室へと戻るのだった。

翌朝、ファクトはルカのけたたましい大声で目を覚ました。

「大変です！ 大変です、ファクトさんっ！！！」

何度もノックする音。ただ事ではないようで、ファクトは急いでドアを開けた。

「カルデイ様が、カルデイ様がいらないんです！」

「何ですと!?!」

ルカの表情は真剣そのものだった。二人でファクトをからかっているなら可愛いものだが、そんな余裕があるようには見えない。

「……………くつ。仕方がありませんね……………」

そうしてファクトは、昨日届いたあの手紙をルカにも読ませた。どの道わかることとはいえ、その事実を伝えることは躊躇われるために、隠すつもりでもいた。しかしもうどうしようもない。

「嘘……………そんなことって……………!?!」

手紙を読み終わったルカは愕然としていた。それは恐らく、昨日のカルデイ以上に。

手紙をさっさと取り上げ、ファクトも辛そうに目を瞑る。その時だった。

「ここだな。いるなら出て来い！ 差し押さえに来たぞ！」

「お前は真面目すぎんだよ。ストレートに言っても出て来ねーだろが」

がやがやと騒ぐ声が聞こえる。ファクトが恐る恐るドアを開けると、

そこには軍服を着た兵士達がいた。

「この家の執事の方ですか？」

騒ぎ立てる兵士達の後ろから出てきたのは、いかにも威厳のありそうな将校の男。

そこに立っているだけで威圧的な空気を醸し出し、そのくせ笑顔を作っている。

「私はハインツと申します。なに、ご安心ください。私は軍では鬼教官で有名ですが、一般人の方には普通に対応させていただくつもりです」

咳払いを一つ。穏便な言葉とは裏腹に、目の奥がギリリと光ったような印象があった。

「家宅捜索を開始せよ！　だが私達は盗賊ではない。目的は高価な物品の差し押さえだ。」

関係のないものを私欲で押収すれば、即刻死罪である！」

かと思えば、至極真つ当なことを言い出すこの軍人。兵士達も次々に屋敷に入っていくが、上官命令に従い粗い探し方はしていない。

（全てを奪われ尽くすのは覚悟の上。しかし、どうも油断なりませんな……）

正体の見えないハインツを前に、ファクトは警戒していた。

「大丈夫です。いかに差し押さえとはいえ、私共も人間です。思い出の品などがあれば、それだけは残させていただくつもりですよ」

言いながら、彼はファクトとルカに指令状を見せた。それは確かに政府発行のもの。

ルカも落ち込むばかりで、何も言い返すことは出来なかった。

一時間もすれば、家財の殆どは持ち帰られていた。筆筒、椅子など大型のものを中心に。

ただしリビングには最低限の机と椅子だけは残されており、カルデイの下着類などプライバシーに関わるものは全く手付かずで置いてあった。さすがに衣服や見られても恥ずかしくないものは全て押収されていたが、それだけでもまるで異常事態である。

「この屋敷は一週間後に売却の予定となっております。それまでに身の振り方を決め、退出の準備をしてください。私共には持ち出しかねるものも残しておりますので、そちらもご検討くださいますよう。それでは、これにて失礼します」

ぺこりと頭を下げるハインツと、指揮下の軍人達。驚くほどクリーンなやり方だった。

お家取り潰しも家宅捜索も事実だと知ったうえで、二人の口からは文句の一つも出ない。

「ファクトさん、これからどうしましょうか……」

「そ、そうです！ カルデイ様を捜さなくては！」

突然の事態に流されていた、カルデイの失踪。それから二人は必死でカルデイを捜し回ったが、遂にその日は見つかることはなかった。

翌日の広場は、人でごった返していた。超弩級の奴隷が販売されるというのである。

奴隷は男女とも需要があるが、販売される奴隷の条件は二つ。

一つは他国から誘拐され、時には戦争時の戦利品として連れてこられること。これだけでは、基本的に自国の者が奴隷になることはない。

二つ目は、望んでなることである。経済的に困窮し生きることすらどうしようもなくなった場合、自らを売って大金を得るという方法だ。ただし本人が受け取ることとはできないため、家族など守りたいものが共に困窮の最中にある場合の最終手段となる。

今日の目玉として立たされた少女は、その二つ目の条件で奴隷として販売されるのだ。

（これでいいのよ……これでファクトとルカが楽になれるのなら……それに、それにどうせお父様はもう私を……）

そう。その少女こそがカルデイなのである。みすばらしい服を着て、悲壮感に包まれた表情をしている。

奴隷に優しくした彼女が、奴隷になることを好しとするはずがなかった。そんな彼女を一人きりの決断に追い込んだのは父の手紙。事実ばかり、自分のことばかり書いていた父の手紙を読んで、愛されていないと悟ったのだ。具体的な対応策がなくても、そこに「誕生日おめでとう」

この一言だけでもあれば、カルデイの心は救われていた。仕事漬けの父の連絡を待ち侘びていた彼女だけに落胆はひどく大きい。結果、自暴自棄になってしまったのだ。

ファクトヤルカが隣にいてもそれは変わらない。愛情は愛情でも、種類の違う愛情。

例えるなら肉親の愛情か、恋人の愛情。現在の凍りついた彼女を融かすとすれば、そのようなものしか力はない。

「さあ、今日はとんでもない目玉商品がございます。なんとあのファルム家の一人娘、カルデイです！ 御存知の方もおりますでしょうが、ファルム家は家長である大臣の汚職により破産。家財を売っても余りある借金を返済するため、彼女自身が立ち上がりました！

どうです皆様！ 彼女を助けるためと思い、より高い入札をしてあげませんか！？」

実を言うと、カルデイはまだ胸の奥底に希望を持っていた。なぜなら、目の前に立っているのは見知った人物ばかりなのだ。

（この人達は普段からお話する仲よ……落札のフリをして助けてくれるかもしれない。それに、昔ながらの三流小説なら、こちら辺でヒーローが現れるのよ）

自分を励ますように言い聞かせ、かすかな希望を抱いていたカルデイ。そんな淡い期待は、次の瞬間見事に打ち砕かれた。

「おい、あのカルデイだつてよ！」

「金持ちの娘を飼うつてのも、また楽しそうねエ。私は十万ギネアだよ！」

「三十万！」

次々と上がっていく入札額。カルデイは絶望した。

(嘘……肉屋のおじさん……パン屋のおばさんも……!?)  
もう彼女の心から、希望は消え去っていた。親しいと思っていた者達に裏切られ、どうしたらいいかわからなくなる。感情は完全に停止し、跳ね上がる入札額を聞き流しながらだらりと俯いていた。

「二百万!」

ざわめいていた広場が、しんと静まり返る。購買層の庶民達が小出しで探り合う中、その五倍もの額を出した男がいた。紳士的な雰囲気を持つ、見た感じ貴族風の男だ。

「他にはおらんかね? いなければ落札したいのだが」

開催者までもが絶句する中、男は平然と尋ねる。あとは首を横に振る者ばかりで、自動的に落札が決定した。

「では、来なさい」

カルデイが、丁度ルカを落札したあの日のように落札者に連れて行かれる。意気消沈した彼女は頷き、目の前の男について行ったのだ。

男が用意した馬車に揺られ続け、一時間ほどが経っただろうか。確実に地元の町からは離れ、カルデイの知らないところへと来ている。「着いたぞ。降りなさい」

馬車が開き、到着を教えられる。

指示通りに降りると、そこには自分の家と同程度の屋敷があった。

(これが……この人の……? でも、もっと大きくてもいいぐらいに見えるけど……)

男からは、そこそこの金持ちらしい感じがした。家の大きさを照らし合わせるとカルデイには不思議に思えて、かつての自分もそう思われていたのだろうと思いつ返す。

「私は何もしないさ。とにかくついてきてくれ。中に入る」

「はい……」

馬車の中で一時間も一人で揺られ続け、少しは想いが落ち着いていた。

だがどうにもならないという結論は変わらない。逆らうことなく、カルデイも屋敷の中へ続いた。

屋敷の中を少し歩くと、男が立ち止まったのは一つの部屋の前。ドアをノックしている。

「父上ですか。お久しぶりですね、入ってください」

部屋の中から聞こえたのは、若い男の声。

(父上……？ お久しぶり……？ 一緒に住んでいるわけじゃないの？)

男の息子と思わしき声に従って、共に中に入る。そこには銀髪の少年が立っていた。

「父上、そちらの……女性はどうなたですか？」

カルデイにちらりと目を落とし、もう一度父と目を合わせる。おそらくカルデイの着ている奴隷の衣装を見て、何事かとも思ったのだろう。尋ねる息子に、父は一言だけ答えた。

「お前にも長いこと会っていなかったからな。お前のために最高級品を用意したんだぞ。」

奴隷だから、好きに使って構わない。それじゃ、私はもう行くからな」

「あっ、父上！」

言いたいことだけを言い残し、脱兎の如く抜け出す『父上』

残された二人は呆然とし、顔を見合わせる。大きく溜息をつき、銀髪の少年は言った。

「……仕方ない。とりあえず入ってくれ。話を聞きたい」

「は、はい」

何を命令されようと、もはやカルデイに逆らう気力はなかった。けれど相手の素性が知れるまでは従うべきと判断し、彼女は勧められるまま椅子に座った。

「さて。まずは確認させてくれ。父上が購入された奴隷ということだが、それは本当か？」

「はい」

頷くと、銀髪の男は座ったまま顎を抱えて考え込んだ。真面目な表情で考えていて、口調からも冷静な男なのだろうと推定できる。

（それにしてもこの人………まさか私と同じ年齢じゃ………）

カルデイには、彼が自分より年上にも、また年下にも見えなかった。外見は、頭の形に沿うようなおぼっちゃんヘアーは肩まで伸びていて、普通の体型だがどちらかといえば細身。背も人並みくらい。顔や雰囲気はだいぶ良いほうだ。

（惚れたりするレベルじゃないけど………随分まともね。でもこついうのに限って一癖あるものよね………）

突然の事態に強制的に取り戻させられたと言っべきか、考える余裕だけは取り戻したカルデイ。銀髪の男をじっと見定めていると、彼はとんでもないことを口にした。

「そうか。僕の父上が失礼をした。帰ってくれて構わない」

銀髪の男が椅子から立ち上がり背を向けて歩き出す。カルデイは、咄嗟に彼を呼んでいた。

「ね、ねえ!!」

名前を知らないものの、なんとか呼びつける。男はカルデイに向き直った。

「何だ。恨まれる覚えはないぞ」

言葉通り、恨まれることは何一つしていない。何せ一切害を与えずいきなり解放したのだ。

それ故にカルデイは不思議に思った。何故いきなり恨まれるという考えに繋がったのかと。

そして、ならばそれを利用してみようと。

「恨まれることならあるわよ。勝手に買われて勝手に連れてこられて、今度は勝手に解放？ 解放されたって、こっちは帰る場所なんて無いのよ!!」

相手の意図を探るための、ただのハッタリのもりだった。

だが言葉が進むにつれ、感情が膨らんでいく。仕舞いには爆発し、

なんと怒鳴りつけてしまったカルディ。気がつけば、目頭にうつすらと涙が浮き出ていた。

それを見てぎょっとしたのか、男は顔を押しえて溜息を零した。

「あー、もう。わかった。ここで暮らせばいい。連れてきた責任はそれでいいだろう?」

ぼろりと零れた小粒の涙を拭くカルディ。男は、溜息をもう一つ。

「すぐ帰すから自己紹介なんていらなと思うていたけどな。僕はリーズ・ミュレアだ。どう呼ぼうと勝手だが、呼び捨てで構わない。部屋を見繕うから、暫くここで待っている」

「……………カルディよ。ファミリーネームは無いわ」

リーズは返事をせずに、再び背を向けて部屋を出て行った。苦しげな呟きと共に。

「全く、僕としたことが何故こんなことに。恨みますよ、父上」

縁か日頃の行いか、あっさりと居所を手にしてしまった。とはいえリーズも善人だと決まったわけではない。これからに不安を覚えなわけではなかったが、ひとまず安心するカルディだった。

## 2話 - 御嬢様も貴から落ちる（後書き）

サブタイトルは諺を文字っておりますが、ネタが切れ次第やめることをお断りしておきます。

今回『嬢も貴から落ちる』にしようと思いましたが『嬢』一文字で検索するといかがわしいイメージだらけだったのでやめました。

さて、ここで語るのも反則ですが。

主人公は今回初登場のリーズです。ヒロインはカルディです。

作者都合によりどちらも美形です。作品的にはどっちでもよかったけど。

展開につきましては、一声すら無かったので独断で進めました。

というか作者としてそれが当然かもしれないですね……尋ねちゃって

ゴメンナサイ

ですが感想やお気に入り登録など頂ければ嬉しいのも事実。このお話を楽しみにしてくれている方は、果たしておられるのだろうか？

### 3話 ・ 笑う門には服着たる

ひとまず部屋を宛がわれ、与えられるままに部屋に入ったカルディ。彼女には、気にかかっていることがあった。

（あのリーズってヤツ、一体どういつつもりで……それにこの部屋、どう見ても奴隷用の広さじゃないわ。そもそも私を受け取ること自体を迷惑そうにした節があるし……）

考えれば考えるほどわからなくなる。悩み続けていると、そこに丁度悩みの元が訪れた。

「僕の服だから男物だが、その奴隷衣装よりはマシだろう。浴室に案内するから、出たら着ているといい。新しい衣服は明日買いに行くから、それまで我慢してくれ」

言いたいことだけを言うと、再びぐるりと背を向けるリーズ。この機を逃す手はないと、カルディは彼を呼んだ。

「リーズ！」

居場所を得たことにより、考え事をするぐらいの精神的余裕は戻ってきている。彼の言葉の真偽を確かめる意味でも、彼を呼び捨てで呼んでみた。

「なんだ」

すると返ってきたのは普通の返事。カルディが、ひとつひとつ探りを入れていく。

「私は貴方のお父さんが買ってきた奴隷なのよ。奴隷に部屋や服を与えるなんて、ましてや買いに行くなんて、一体どういつもり？」

「奴隷の扱いとしては破格だわ」

「奴隷を自称する割には、というより奴隷にしては、相変わらず口が悪いな」

ゆっくりと近付くリーズに身構えるカルディ。リーズは両手を前に出して制止した。

「動く度に警戒されてはたまらない。心配しなくても、僕は君を奴



「貴方の言っていることは確かに正しいわ。誰だって恨まれることは避けたいし、恨まれすぎるのも危険よ。でも貴方、もしかして人の目ばかり気にして生きてきたんじゃない？」

「ぐっ……」

思わずたじろぐリーズ。端正な顔立ちをしているのに、今だけは情けなく見える。

「そんなの何も楽しくないわ。恨みを買うことなんて滅多に無いし、奴隷に殺されるなんて人は、きつと暴力を振るいすぎたのよ。だから、多少はやりたいようにやったほうが得つてもの。ましてや人の目を気にしてビクビクしながら生きてても、生きてる実感なんてありゃしないわ」

リーズは黙り込んでいる。その沈黙が、彼女の言葉を受け入れている証拠だった。

「そこまでの恐れ様なら昔何かがあつたんでしょうけど、そこは聞かないわ。でも治したいなら、付き合つてあげるから、私にだけでも堂々としてみない？」

「……何をしても恨まないか？」

最初は警戒していたはずのリーズ。だが心に傷があるらしいことがわかり、カルデイはなんだか彼を助けてあげたくなる。そんな自身に溜息をつきながら、返事を返した。

「体罰とかは論外よ。もつとも、体罰なんてされる程低レベルじゃないけどね」

「なぜ人の恨みを恐れていたか、過去を語る予定は一切ないぞ」

「安心して。全く興味ないわ」

リーズが初めてフツと笑った。カルデイもつられて笑う。

「そうそう。その代わりに、私をこの家に置いて頂戴ね。帰る家が無いのは本当よ」

「わかつているさ。君の生活は保障する。さあ、まずは浴室を案内しよう」

一緒に部屋を出る二人。浴室に到着し、あれこれと説明した後になり

ーズは自室に戻った。

「さすが貴族サマね。必要なものは揃ってるわ」

準備の良い浴室に感嘆しながら、衣服を脱ぎ捨てて浴室に入った。

「夕食だ。と言っても、突然だから良いものは用意できなかったが」  
部屋にカルデイを呼びにきたリーズ。彼の後についていった先で見  
たものは、確かに良いものではなかった。

「これは……何？ 買ってきたの……？」

テーブルに並べられていたものは、確かに美味しそうな料理だった。  
だがそれは、言い換えるならば惣菜とでもいうのだろうか。街の食  
堂の手作りおかず軍団である。

「街の食堂で毎日買ってきているんだ。栄養はしっかり考えている  
から問題ない」

まるで気にせずリーズは席に着く。カルデイは、もしかやと思って尋  
ねた。

「調理師とか……雇ってないの？ 食事が毎日の楽しみになるわ」

「必要ない」

「執事はいないの？ 全て取り仕切ってくれるから、ありがたいわ  
よ」

「昔はいたが今はいない」

「お手伝いさんは？ 話し相手にもなってくれるわ」  
「必要ない」

一応マナーは心得ているようで、一人で勝手に食べ始めることはし  
ない。だがこのリーズという男は、どうにも常識に欠けたところか  
あるらしい。

「貴方って、時代が時代なら……」

「どうした？」

「いえ、何でもないわ」

その先は失礼だと思い、言うのを止めた。屋敷にはリーズただ一人。

教育者もいなければ無理もなく、ここまでまともなら逆に褒められる位だと思ひ返したということもある。

「本当に、誰もいないの？」

「ここ数年ずっと僕一人だ。母はいないし、父は僕を放って放浪の旅に出ている」

（酷い話ね……でも……）

話を聞いて、思うところがあつたカルディ。ある意味当然のことを、思い切つて尋ねた。

「寂しくないの？」

「寂しいさ。庶民の友人がいるが、彼らは皆『忙しい』の一点張りだ。ここ数ヶ月は会つてもいない。冗談みたいな話だが、人と話をするのは一週間に一度だけだ」

彼女の言葉にかぶせるように、本当の気持ちを話したリーズ。彼はどこか堂々としているようで、またふてくされているようで、腕を組んだまま横を向いていた。

「はあ……」

「溜息が出るほどつまらない話だろう。飽きたなら早く食べるぞ」話を誤魔化すように、リーズがフォークを手に取る。

「なら私は貴方が手に入れた奴隷なんだし、やらなきゃいけないことがあるわね」

「だから奴隷ではないと……いや、何をするつもりだ？」

ハッと感付き、真顔でカルディを仰ぎ見るリーズ。彼女はにっこりと笑つて言った。

「料理ぐらい作つてあげるわ。これでもなかなかの腕なんだから」「それは期待していいんだろうが、僕は奴隷なんて買ったつもりはない」

「なら使用人でどう？　こんな可愛いお手伝いさん、他にいないわよ」

ずいっと顔を近づけ、人差し指をピンと立てている。リーズはもう諦め気味なのか、自分の額を片手で抱えながら言った。

「どうにも自信過剰な使用人だが、雇わせてもらおう」  
「当然よ。ここに置いてもらう以上、お礼ぐらいさせて頂戴」  
「なんだかんだで席に着く二人。フォークを手に取り、揃って食事を始めるのだった。」

翌朝、目を覚ましたカルディは外出の準備を済ませてリースの部屋にいた。

「それで、どうするの？　まずは朝食よね」

「町に出よう。いろいろと買うものがあるだろう」

明確な答えは示さずに歩き出すリース。朝食のことにはなく、返事を得られなかったことに少しばかり不満を抱きながらも、カルディは彼の後ろについていった。

「さあ、僕の後ろに乗ってくれ」

リースの向かった先は厩舎だった。

三頭分のスペースの中に佇んでいたのは、たった一頭の黒い馬。

「サラブレッドは嫌いだね。ポニーだから二人乗れる」

愛馬、シエラが存在を途端に思い返す。

リースの愛馬は同じポニーだが対称的な色で、カルディは興味を持った。

「どんな名前なの？」

「アルという。カマルグのオスで、子供の頃から飼っていてね」

「なんだか似てるわね」

「何？」

アルに乗り、騎手のリースに掴まりながらフツと笑う。その意味がわからなかったらしく、彼はその理由を尋ねた。

「何が似ているんだ？」

「私もね、ポニーを飼ってたの。カマルグのメスで、体色は白。そして、貴方と同じで子供の頃から一緒だったの。名前はシエラよ」  
「ゆっくりと歩き出すアル。リースは彼女の言葉を聞きながら、返す

言葉を考えていた。

「奴隷になったということとは、全て手放すということだ。つまりそのシエラも手放してしまったというわけか……………いや、すまない」

言い終わってからようやく自分の失言に気付き、一言詫びるリーズ。背後のカルデイは、彼の服をぎゅっと握った。二人はひたすら無言で、馬を走らせ続けた。

「着いたぞ。歩きではなかなかかかるが、馬だと早く着くからな」町には馬を連れて入ることも出来るが、入り口に馬の預かり所もある。リーズもこれにならない、アルを預けた。その時カルデイの目に入った、とてもよく見慣れた存在。

「シエラ!？」

そこにはカルデイの愛馬、シエラが繋がれていたのだ。つまり、誰かがシエラを連れて町に来ているということになる。そんな条件が思い当たる人物は二人しかいない。

「ファクトとルカが来てるんだわ!」

途端に目を輝かせ、ぱっと辺りを見回す。彼女の肩を、リーズがポンと叩いた。

「どういう状況かは大体読めたが、とりあえず落ち着こう」

「あ……………そ、そうね」

ハツと我に返るも、喜びを抑えきれない様子のカルデイ。リーズも彼女の気持ちを理解し、いかにもわざとらしく提案した。

「どうだろう。心当たりのある者を今から捜してみても」

「買い物はどうするの?」

「今を逃がせば捜せない。今しか出来ない方が先だろう」

カルデイの返した質問も実に胡散臭く、答えなど決まっているようなものだった。

そしてどうやら、リーズは彼女の期待通りの答えを返したらしい。その瞬間に駆け出す背中を止めるべく、制止の声をかけた。

「待て!!」

「何？」

昨日自分を説得した少女とはまるで別人のよう。リーズはそう思った。

「闇雲に捜しても仕方ないだろう。条件を照らし合わせていこう。まず、なぜこの町に来ているかを考えるべきだ。そういえば聞いていなかったが、君はどこから来たんだ」

「ミナウよ。執事と使用人と私で、三人で住んでいたの」

「ミナウ？ 随分遠くだな。とすれば、何か目的があると考えるべきだ」

「噂か何か聞きつけて、私を取り返しに来てくれたのよ」

「なら、そうだな。正攻法で取り返せるとは思わないはずだし……これがもし僕なら……強攻策に出るために、武器屋で準備を整えるかな」

一つずつ絞っていき、予想の答えは出た。あくまで予想だが、二人で目を見合わせる。

「武器屋に案内して！」

「……やれやれ」

言いながらも、目的の武器屋へ向かって駆け出すリーズ。到着しカルディにドアを開けさせると、そこにはあの二人がいた。

「ファクト！ ルカ！ 私よ！」

ロングヘアを押し込んだ帽子を取り、煌くブロンドがばさつと下ろされた。

それを見た二人はわなわなと震え、それから三人でがしつと抱き合ったのだ。

「カルディさん!! よかった、やっと会えました！」

「カルディ様、よくぞご無事で！」

わいわいと騒ぐ三人。その様子を、店主のオヤジがじと眺めていた。

「あんた達、冷やかしは構わないが外で騒いでくれないかね」

「す、すみません……」

時間の関係なのか他に客は一人もいなかったものの、流石に恥ずかしく思った三人。

そそくさと店を出ようとして、出口でカルデイがぴたりと立ち止まった。

「紹介したいから、リーズも一緒に来て頂戴」

「なに、僕もなのか」

ファクトとルカが目を合わせる。彼がぺこりと礼をしてみると、二人も礼を返した。

「なら、とりあえず食堂に行くか。朝食でも食べながら話せばいい」

「それがですな、お恥ずかしながら私共は手持ちがあまり無く……

遠慮させていただきたいと」

「そんなの大丈夫よ。リーズが全部出してくれるわ」

「お、おい！ 君は俺の……いや、出そう」

言いかけてやめる。その先を言っではいけない気がしたのだ。まさか、奴隷などとは。

「俺の？ なんですか？」

「ま、まさか妻とか言うんじゃない……」

「違う違う……」

あくまで疑問として尋ねるファクトと、壮大な勘違いをしているルカ。カルデイとリーズは声を揃えて否定し、誤魔化すように食堂へと足を進めた。

「いらつしやいませー」

老若男女、様々な人間の集まる食堂。今日も賑わいを見せ、朝から盛り上がっている。

「朝食セットを四つ」

空いている席に座り、店員に注文する。

「大声を出すわけにもいかないわ。驚くかもしれないけど、我慢して静かに聞いてね」

こくりと頷くファクトとルカ。前置きで確認を取ると、カルデイは

話を始めた。

「勝手にいなくなつてごめんなさい。あの時は私、どうかしていたわ。とにかくファクトとルカを助けようと必死になつて、奴隷になつたのよ」

「そうです。奴隷商人がやってきて、心苦しいながらもカルディ様のお気持ちを無駄にすまいと、受け取ることに決めたのです」

「私は受け取りたくないと言つていたのですが、お金がないことにはカルディさんを探すことも出来ず…… 諦めて、受け取ることにしました」

「お金が無い？ どういうことなの？」

ファクトとルカの二人は、こくりと頷き合つた。

「旦那様からの手紙にあつた通りです。お屋敷は差し押さえが入り、今や私達のものではありません。それにより借金はだいぶ軽減されましたが、あと少しだけ残つております」

「そうだったのね……」

項垂れる三人。席には左からファクトとルカ、対面にはカルディとリーズが並んで座っている。同席したリーズは気まずいという他ない。

「……リーズ、お願い！ この二人も、貴方の家になんとか住ませてもらえないかしら」

カルディはここで驚きの行動に出た。リーズに身を寄せ、その手がかしつと握つたのだ。

「色仕掛けなら通じないぞ。こんな時だけ見せる都合の良い例はいくらでも見ている」

カルディは確かに可愛らしく、美しい。そんな女性に擦り寄りながらも、あくまで冷静に努めるリーズ。カルディも実のところそんなつもりではない。

その証拠に、彼女は慌ててリーズから体を離れた。演技ではない。

「ご、ごめん。そんなつもりじゃ」

だがリーズは彼女の行動を見て、カルディがどれだけ二人を大切に

しているか、どれだけ二人を保護してやりたいのかを悟った。そして向かい合った二人も、主君を立てるように小さく頭を下げている。

「……はあ」

リーズは遂に折れた。

「二人増えるぐらい問題ない。騒がしくなつて丁度良いだろう」

わつと声をあげ、喜ぶ三人。ファクトとルカはペコペコと頭を下げ、カルディはリーズを見てにこにこ笑っている。

「まったく現金なものだ。さつき落ち込んでいたかと思えば、もう笑っている。だが、確かに君は笑顔の方が似合っているな」

「随分とキザなお方ですな。とても似合っておりますが」

「もしかしてカルディさんを狙っているんですか!？」

二人ともからかっているつもりはないのだろう。だが、二人の発言でリーズは初めて自らの言葉に気付いた。そんなつもりはなかったものの、弁解せざるを得なくなる。

「違う! そういう意味ではなくてだな」

「注文したお料理が来たわよ」

だが隣のカルディは全く動じることなく、店員から料理を受け取っている。

「君は僕の失言について、何も思わなかったのか？」

「貴方に恋愛感情でも抱いてたら、少しは動じたかもしれないわね。でも残念ながら、今は何も思わないわ」

奇しくもカルディのそんな言葉で笑いが生まれ、結果としてリーズも彼らに溶け込むことができた。四人で取る朝食は、リーズにとつてとても楽しいものだった。。

それから一行は、必要な買い物を済ませるために他の店に立ち寄ることになった。

何を買うかといえば、まずは衣服である。差し押さえにより衣服は全て奪われ、カルディはおるかルカやファクトの衣服すら持ち合わ

せていないのだ。

当然ながらリーズも同行したのだが、こういう場では女性陣が盛り上がるものである。

「ねえリーズ。これ、どう思うかしら？」

「いいんじゃないか？」

「これは？」

「いいんじゃないか？」

そんな応答を繰り返し、カルディに指摘される。

「いいんじゃないか？ ばっかりじゃない。本当に見てるの？」

「女性の服はわからない。大体君は素材が良いのだから、何でも似合うはずだ」

「褒めてるのか投げ遣りなのか、どっちよ！？」

「褒めているんだがな。お世辞や建前、社交辞令の類は大嫌いだから、これは本心だ」

ぎゃあぎゃああと騒ぎながらも、なんだか楽しそうなカルディ。付き合わされているリーズも、気を悪くしているようには見えない。

そんな二人を見て微笑む、ファクトとルカ。彼らは主君の笑顔を素直に喜んでいた。

「カルディさん、すっかり元気になったようで良かったです」

「そうですね。それにしてもルカさん、なかなかお似合いの二人だと思いませんか」

「ファクトさんですか。実は私もそう思ってたんです。カルディ様はいつも冷静沈着で感情的にならない。そんなイメージがあったんですけど、今はまるで別人みたいです」

ほんの少しだけ、二人を羨ましそうに眺めるルカ。そんな彼女を見て、ファクトは言った。

「カルディ様に聞いた話ではね、あの方はカルディ様を奴隷として与えられたそう。ところが奴隷らしき扱いはせず、部屋を与え、食事を与え、入浴までさせてくださったと。今日この町に来た理由も、元よりカルディ様の衣服を買うためだったようです。本当に良

いお方ですよ。私はあの方を、旦那様とカルデイ様に次ぐ第三の主君と定めるつもりです」

「私の場合は第二の主君ですね。執事と使用人として、また頑張りますよね！」

「ええ。頑張らせていただきますでしょう」

二人が心を新たに語り合う間も、カルデイファッションショーは続く。結局はリーズも三着の衣服を選び出し、それもあわせて購入したのだった。

次は雑貨、最後に食料品と、カルデイ達は全ての買い物を終えた。屋敷に帰るべく馬を引き取りに行く。リーズはもちろんアルを引き取り、ファクトとルカはシエラを引き取った。

「シエラ！　ごめんね、寂しかったわね」

カルデイが頭を摺り寄せ、シエラもブルルと鼻を鳴らして喜びを表していた。

「カルデイ様が失踪されてから、シエラは落ち着かない様子でした」  
「餌も少ししか食べなかつたんですよ」

ファクトとルカの報告を聞き、シエラの頭を撫でる。そのまま背中に乗った。

「折角再会できたんだもの。私が乗っていくわ」

「自分の馬だからな。俺はアルに乗るぞ」

ファクトはアルに、ルカはシエラに乗ることになり、続けて背中に乗った。

「ポニーということですが随分ご立派な馬ですな。人間なら相当な筋力がありそうですね」

「ありがとう、ファクトさん。実はその通りなんだ」

他愛もない話を続け、屋敷へと帰っていく。

いつもの三人に加わって、彼女達を取りまとめることになったリーズ。

舐め続けた寂しさは既にどこかに消え、彼の周りを賑わせていくこ

とだろっ。

そんな毎日でも悪くないと、リーズはフツと笑みを零した。

### 3話 - 笑う門には服着たる（後書き）

実際に奴隷がいた時代に、奴隷を甚振って働かせていた人

耐えかねた奴隷に殺されはしなかったのかと、そんな作者の疑問を乗せてみました。実際、人を虚仮にするものじゃない。

怒りに任せた爆発力というのはオソロシイデスヨ

そして、自分がもし奴隷を得たらこうするだろう。そんな思いも乗せました。

実際、心も頭脳もある人間を道具同然に扱うなんて相当な精神力がないと無理ですし！

だけどそれを可能にしたものこそ、時代の風潮なんだろうなあ。興味深いテーマです

誰か読んでくれるのかな？ コレ 作品然り後書き然り。

#### 4話 - 罵詈雑言

リーズがファクト、ルカを家に迎えた翌日。夕食後の席で、揃った彼らに声をかけた。

「この家の主として、言っておかなければならないことがある。聞いてもらえるか」

大事な話だと理解したのだろう。三人は頷き、一様にリーズに目を向けた。

「僕は貴方達三名を引き取ったわけだが、何もせずに置いておくわけにはいかない。よって、貴方達にそれぞれ仕事を任せたいと思う」「勿論です。何でも致しますぞ」

やる気に有り気に頷くファクトと、成り行きを見守るカルディとルカ。

「まずファクトさん。今日の昼頃、カルディから全てを聞きました。貴方はカルディの家で、執事をやっていたそうですね」

「リーズ様、私などに敬語を使わずとも……それに呼び捨てで結構です」

「ならば僕にも『様』付けは要りませんよ。僕は年長者の貴方を尊敬しているだけです」

遠慮しあってもキリがないと思ったのだろう。感心しながら、ファクトは答えた。

「……ではありがたく受け取らせていただきます。しかし様付けは癖のようなものですので、これについてはお許しください」

「わかりました。では、ここでも執事をお願いします。やはり執事という存在がいてくれると助かりますし、貴方が重ねた年の功を僕は頼りにしたい」

すると、途端に駆け出し部屋を退出したファクト。呆気に取られてカルディに視線を送ると、彼女は笑いながらその説明をした。

「嬉し泣きよ。貴方の態度とその言葉に、えらく感動したみたいね。」

間違いなく忠誠心アップよ。ま、私達はそう上手くいかないけどね」  
「何もそんな狙いはない。それよりルカ、次は君だ」

「は、はいっ！」  
肩を強張らせ、カチコチになってリーズに向き直るルカ。何をそんなに緊張しているのだろうと思いつつも、それはスルーして話を進めた。

「君はカルデイの家で使用人をしていたらしいね。だから君も以前と同じく、ここでも使用人として働いてほしい。お願いできるだろうか？」

「そ、そそれは、もちろんですっ！！」

「……そんなに緊張することは無いのだが」

やはり気になって指摘し、それに応じたカルデイがルカの肩をポンポンと叩く。すると少しは気が抜けたらしく、彼女は幾分か楽な姿勢になった。

「カルデイ、君は……」

「働けって言うなら働くわよ？ この家に置いてもらう以上それは当然のことね」

そう言うつもりはなかったリーズ。先手を打たれたものの、全く違う言葉を返す。

「僕の話し相手にでもなっってくれればいい」

「……は？」

「だから、話し相手になればそれでいい。ずっと一人だと流石に退屈だからな。時々は何かに誘うこともあるかもしれないが、無論拒否しても構わない。君の仕事はそれだけだ」

すっと顔を下げ、わなわなと拳を震わせているカルデイ。大きな溜息をつくとき、一転して落ち着いたようにリーズを見据えた。

「馬鹿にしないで。私にもプライドがあるのよ」

「だからそのプライド故だ。君はこの前まで主君の立場にいたばかりだ。それを考えれば、あれをしるこれをしると言われては辛いだろう。君の立場とプライドに鑑みての話だ」

カルデイは、彼のその言葉をフツと鼻で笑った。そして、言い放ったのだ。

「何か間違えている様だけど、プライドというのは自尊心のことではないのよ。プライドは誇り。私は私の誇りにかけて、貴方への恩を返さなければいけないの。わかった？」

ずいっと顔を近づけ力説するカルデイに、リーズはただ頷くしかない。暫し考え、発言した言葉を訂正した。

「……ならば君にも、その時々に応じて仕事を与えよう」

「それでいいのよ」

もはやどちらが主人かわからない二人。やれやれと首を横に振りながらもリーズは、そしてカルデイとルカも笑っている。

「君達三人の毎月の給料は月末ということにしておこう。まあ、厳密に決めはしないが」

「あら、お給料まで頂けるの？」

「い、いいんですかあ!？」

リーズにそのつもりが無いとはいえ、カルデイは奴隷として、ルカはその付随としてやってきたのだ。それを考えれば、彼女達が驚くのも無理はないことである。

「君のような美しい女性は、奴隷ではなく恋人とでも言うておいたほうが僕の株が上がる。必要次第では協力してもらうだろうから、その先払い金とでも言うておこうか」

「あらあら。冗談半分で女性を褒めないことね。そんなことばかり言うてたら、いつか嘘つきピエロになっちゃうわよ」

「本気にする相手なら言わないさ。例えば、町のエミリーおばさんなんかには言えないな」

ニツと笑いながら、ジョークの投げ合いをするリーズとカルデイ。根っからの庶民であるルカには、二人のやり取りはとて格好の良いものに見える。彼女が惚れ惚れしながら眺めていると、リーズは彼女達に給料を支給する本当の理由を話した。

「仕事の内容は特に決めない。汚れが目立ってくれば掃除を頼むし、

当然ながら食事は毎日頼むだろう。そんな当たり前のことをしていけばいいだけだ。その他の時間は基本的に休みに構わない。だから、言ってしまうえば日常生活の延長で構わないということだ。つまりいつでも日常生活に戻れるわけだが、そんな時に所持金が無くては何も楽しめないだろう。人間、何かしらの楽しみは必要なものだ。そのためとは言わないが、給与を与えることにする。本当のところ、これが理由だ」

啞然とするルカ。カルデイが一度頷き、リーズは言葉を続けた。

「そういうわけだから休日も定めないが、何か用事がある時は言ってくれればいい。そして、制服の類は一切用意しない。あれは確かに統制感と清潔感を出すことはできるが、実際の機能面でいえば何の役に立つでもない。また、着たまま外に出れば周囲の目も引いてしまうことだろう。それならば私服の方がすぐに動けるというものよって私服を採用する。僕は機能重視だからな。ちゃんと働くならどんな服でもいいということだ」

「わかりましたッ!!」

先程のファクトとは対照的に、にこにここと笑いながら部屋を退出するルカ。リーズは無表情で彼女を見送り、カルデイに尋ねた。

「ファクトさんは嬉し泣きということだが、笑いながら出て行ったルカは何だ。僕が何か面白いことを言ったか？」

「本気で言ってるなら、あなた鈍感よ。あれもあれで嬉しさの表現じゃない」

カルデイに溜息をつかれるが、リーズにはその理由がイマイチわからない。変わらず不思議そうにする彼に、カルデイは仕方無さそうに説明した。

「私の所が最初だったから実体験はしてないでしょうけど、あのコモやっぱり奴隷といえは酷いイメージがあるのよ。それが優しい主人に自由度の高い待遇で迎えられて、まるで世界が百八十度変わったようなイメージなんじゃない？」

「百八十度ということは、以前雇っていた君は酷い生活を強いてい

たのか」

「失礼言わないで。これは例え話よ」

「……すまん」

外してしまった失言に頭を掻きながら、自室へ戻ろうと席を立ち上がる。

「明日は朝が早いので失礼する」

「あら、どこに行くの？」

言わなければいけないわけではない。言うか言うまいか考えてから、その行き先を告げた。

「アルの気晴らしと散歩を兼ねて、少し離れた野原に行くだけだ」

「アルって貴方の馬よね？ いいわね、私も連れて行ってよ」

リースはしまったと思ったが、時は既に遅し。

「行ってどうするんだ？ することもないだろう」

「あるわよ。私もシエラがいるもの。たまには広い場所に連れて行ってあげなきゃ」

「……… 昼頃の到着を予定している。今日と同じぐらいに起きてくればいい」

同じように愛馬がいる者として、理解してしまった彼女の気持ち。諦めながらも遠回しに許可すると、彼女は喜んでいた。

翌朝、準備を済ませた二人。荷物を持って玄関に向かうと、丁度フアクトと遭遇した。

「おはようございます。カルディ様、リース様、お出かけですか？」

「ええ。アルを遊ばせてきます。遅くても夕刻には帰るので、留守はお願いします」

「私はシエラを」

「わかりました。いってらっしゃいませ」

フアクトはぺこりと頭を下げ、二人を見送る。そこから厩舎までの

道で、リーズがカルデイに可笑しそうに言った。

「しかし、ついてくるとはね。働くと言ったのは君の方だろう？」

「休みはいつでもいいと言ったのは貴方よ」

ああ言えばこう言うといった感じで、カルデイは余裕たっぷりに返す。

「……シエラを遊ばせてあげる場所なんてなかなか無かったから、連れて行ってあげられることが嬉しいのよ」

「成程ね。シエラは幸せ者だな」

「ええ」

嬉しそうに笑うカルデイ。二人は厩舎に入り、それぞれの愛馬を外へ引いた。

そうして訪れた最初の目的地は、なぜかリーズの地元町。昨日買い物をしたばかりの場所である。

「何か買い出しでもあるの？ それなら」

「昨日は成り行きで食堂に行ってしまっただろう。本来はそこじゃなかった」

疑問符を浮かべながらも後を追うカルデイ。すると、少し先で彼はピタリと立ち止まった。

「ここで待っていてくれ」

「え？ うん、わかったけど……」

リーズが入っていったのはパン屋。店主と話しているらしく、店主が店の奥から何かを取り出した。そして代金を払ったようで、店から出てカルデイのところに戻ってくる。

「良かったな。作り立てだそうだ」

「これ……は？」

彼が手渡したのは、一見してサンドイッチのようなもの。

「パニーノだ。知らないのか？」

「知ってるけど、食べたことは無いわね」

焼いたパンに、ハムやチーズ、それにトマトなどを挟んだ軽食である。リーズがすぐさまそうしたようにカルデイも、両手で掴んだパンノにかぶりついた。

「美味しい……」

「そうだろう。お気に入りなんだ」

二人は余程気に入ったらしく、そのままぺろりと平らげてしまった。

「もしかして、朝食のつもりで？」

「ああ。外で食べるこんな朝食もいいものだろう」

「そうね。今度はルカやファクトにも紹介してあげなくちゃ」

フツと口元を緩ませるリーズ。歩き出したかと思うと、その方向は外ではなく町のほう。

「どこに行くの？ 朝食も取ったんだし、出発するんじゃないの？」

「何か携帯できる昼食を買いに行く。朝食後すぐ昼食の話と卑しいようだが、実際見晴らしの良い野原に行つて何も食べないんじゃ、勿体無いつてもものだろう。到着予定は昼頃の予定だしな」

「それなら」

何かを言いかけるも、リーズは気付いていないようでスタスタと歩き去る。カルデイは少しだけ高い彼の肩をポンポンと叩き、くるりと振り向かせた。

「昼食ならここにあるわよ」

「まさか、作ってきたというのか!？」

「正解。ただついていくだけじゃ悪いでしょう。これで堂々と行けるってものだわ」

「まったく…… いや、ありがとう。その味、期待するでしょう」

「そんな言い方しかできないのかしら？」

冗談を言い合いながら、笑い合う二人。踵を返し、町の出口へと向かう。

それぞれの愛馬、アルとシエラを受け取り、二人は出発したのだった。

約一時間後、二人は目的の場所に到着した。風の吹きぬける、緑一面の大平原である。

中央に一本生えている大木。その下でリーズはアルの歩みを止めさせ、タツと降り立った。

「よし、好きに遊んでこい」

アルの腰を軽く叩くと、アルは喜んで走り出していく。カルデイも同様にシエラを促すと、こちらと同じように駆け出していった。

「いい場所ね。シエラも喜んでみたいだし、ついてきてよかったわ」

「君の住んでいた場所にはこんな場所はなかったのかい？」

リーズの言葉に、ギクツとしたように黙り込むカルデイ。彼はその表情を疑問に思ったが、すぐにその理由に気付いて彼女に謝った。

「……すまない。また失言を。どうにも僕は、注意が足りないな」

「……構わないわ」

途端静かになり、風がさあつと吹く音だけが通り抜けていく。

リーズは少し悩んでから、失言を覚悟の上でカルデイに言った。

「どうしても嫌ならいい。だが、話さないよりも話したほうが楽になるということはある」

「だから、隠していることを話してくれ……ってこと？」

何も言わず頷くリーズに、カルデイは観念したように目を向けた。

「信じてた人達みんなに裏切られたの。……いえ、裏切られたなんて言ったらいけないわね。私が勝手に信じてたんだもの」

「それは……」

「私が奴隷になって市場に出た途端、いつも仲良くしていたおじさんやおばさん達が、私を手に入れようとしたの。あの人達の本性を見てしまったし、金持ちの娘を飼うのも楽しそうなの何だの、酷い言葉も聞こえたわ。私は彼らを見て人間不信になりかけたけど、自分ですぐに振り切った。でも、やっぱりまだ無理だわ」

「カルデイ……」

隣に座り込む少女が、急に小さく見えた瞬間だった。整った顔には悲壮感が漂っていて、沈黙がその空気をいつそう重くする。リースは自身の一言により打開しようとするも、喉元を過ぎるには至らない。今だけは、草原の風がやけに煩く響いている気がした。

「ね？ だから」

「なら、僕は君を裏切らない」

重苦しさを堪え、やっとの思いで発した言葉が、偶然にカルデイの言葉と重なった。

「ルカから聞いた。君はとても優しい女の子だ。その優しさを仇として返されるばかりでは、君があまりに不憫すぎる。だから、そんな奴らの言ったことはもう忘れるんだ。聞き流してしまえばいい。僕だけは君を裏切らないから。絶対に、何があるうと」

じつと彼女を見つめ、怯むことなく言い切るリース。カルデイは一笑了。

「な、何がおかしい！」

「だってその言葉、自分で復唱してみなさいよ。どう考えても告白用の台詞よ？」

自らの言葉を振り返ってみて、顔を赤くする。今更気付いて恥ずかしそうにする彼を見て、カルデイはいよいよ噴き出してしまった。

「まったく、無神経というか生真面目というか……普通なら女の子は惚れちゃいそうなのよ、これじゃ落ち込んでたことすら馬鹿らしくなってくるわ」

「そ、それでは！？」

リースによる誤魔化し混じりの大仰な驚きに、カルデイはニツと笑みを返した。

「信じさせてよね。今度裏切られたら、いよいよ人間不信になっちゃうから」

「大丈夫だ。そんなことには僕がさせない」

「……好きでもないのに平然とそんな言葉を吐く辺り、貴方って罪よね……」

「罪？ 僕は何も悪いことは言っていないぞ」

「またもポイントを外したリーズの反応に、カルデイが浅い溜息をつく。」

「そんな空気ごと流すように、彼女はランチボックスを取り出した。」

「頃合でしようし、そろそろお昼にしましょう」

「ああ、そうだな」

「ランチボックスに入っていたのは、数種類のサンドイッチ。朝食でも食べたそれと似てはいたが、リーズ曰くカルデイの持ち寄りたものの方が美味だったという。」

「普通そんな簡単に褒める？ 貴方、やっぱり何もわかってないわ」

「第一、火も使わずに多少味を調べたぐらいの調理パンに過ぎない。」

「そう思いながらも、カルデイの表情には微笑が浮かんでいた。」

「カルデイ様、リーズ様、おかえりなさいませ」

「その後彼らは、自分達の元に帰ってきた愛馬とともに、通ってきた道を引き返した。」

「屋敷に戻ると、出迎えたのはファクト。隣にはルカもいる。」

「夕飯が出来ておりますよ。本日は私の番でしたので」

「昨日はカルデイさんで、明日は私です！」

「外出先から帰ってきて、家に誰かが待っている。そんな感覚を久しぶりに思い出したような気がして、リーズは顔を綻ばせた。」

「おお、リーズ様が笑ってくださいましたな」

「僕は普段、そんなに笑わないんですか？」

「ええ。冷静沈着なお顔もよろしいですが、やはり笑った方が美しいというものです」

「ファクトのその言葉に、リーズはカルデイをじっと見た。」

「だから君は」

「どうしたの？」

「……いや」

ボタンと玄関を閉め、廊下を歩いていく。そこには、四人分の温かい食事が並んでいた。

#### 4話 - 罵詈雑言(後書き)

素直で良い子の貴族だったはずなんです。根が優しい余りに恥ずかしいことを平然と言っちゃう貴族だったはずなんです。

……ピンポイントだな

さてこの辺でご紹介。キャラのネーミングについて。今回は主人公 & ヒロインのみ。

リーズ：『タリーズコーヒー』より拝借。タリーズ リーズ(た抜き タヌキ)ってことで腹黒キャラにするはずが全然違う方向に。カルデイ：『カルデイコーヒーファーム』より。大好きな店で、名前の響きが美しいので拝借。自作でかぶってしまいました。別作品のカルデイとは別人です。

お気に入り登録、感謝しております。

末席でも構わないのです。お気に入り登録数が増えているのを発見しただけで私は……頑張れるッ!!

実際、お気に入り登録を発見した日は文章を考えています。進むかどうかは別として。

評価もくださっていて大変ありがたいのですが、あえて評価をつけなかった方は強制的に0点扱いのようで、総合点数が低く低く……ウワアアアアン

#### 今回の造語

罵詈雑言 + 馬耳東風 ≡ 罵詈雑言 『周囲の雑音は気にせず聞き流してしまえ』

……後書きではペチャクチャ喋りたいの。御免。

5話 - 昔の剣今も刀（前書き）

申し訳ない。お待たせしました。詳しくは後書きにて。

## 5話 - 昔の剣今も刀

カルデイ、ルカ、ファクトの三人がやってきてから、リーズは決まりごとを紙に書いて貼っておくようになった。

しかし何故かルカだけは決まりごとを破り続け、リーズは理由を聞き出すべくルカを呼んだのだ。

「……捨てるなど書いたものを捨てる理由を、いや、書き留めてあることの全てを守らない理由を答えてもらおうか。怒るつもりはないが、流石に不可解だ」

椅子に座り、リーズと向かい合うルカ。彼女はびくびくしながら顔を背け、何も喋ろうとはしない。

「怒るつもりはないと言っただろう。正直に話してくればそれでいいんだ」

それでも口を開かない。リーズが溜息をついて立ち上がると、その時初めて声がした。

「あ、あのー！」

躊躇うような動作を見せながらも、ルカはついに白状した。

「文字が………読めなかつたんです！！」

途端に顔を真っ赤にするルカ。啞然とするリーズ。

「読めない……？」

「はい」

「君は学校には行かなかつたのか」

「行きたかつたけど、行けなかつたんです」

理由は語らない。だが、言わずともわかる。おそらくは経済的な事情だろう。

それを察して、リーズは暫く考えた後に提案した。

「よし。ならば君はこれから学校に通うといい。早速編入手続きを取ろうか」

「え、えええええ！？ 学費は給料から引くんですか！？」

飛び起きるように立ち上がり、目一杯驚くルカ。その言葉を聞いて、リースは思わず吹き出してしまった。

「はは、ははははははははははっ！！！！」

「笑わないでください！ おかしいことは言ってますよ！？」

「あ、ああ。そうだな」

ルカが不満そうに頬を膨らませる。謝るジェスチャーを取りながら、リースは言った。

「給料から差し引いて強制的に学校に行かせたら、そりゃ酷いってものだろう。当然ながら給料とは関係ないよ。安心してくれ」

「で、でもお金は……私、お給料を少しづつ貯めて、そのお金でいつか学校に通うつもりでしたんです。それでいいですから……」

把握したものの、申し訳なさが残るルカの胸中。わかってないならばかりにフツと笑い、リースは彼女に言った。

行かせると僕が言っているんだから、行ってくればいいんだ。さつきは君も、行きたかったと言っていただろう。君の年齢ならまだ編入できるから、行ってくるといい。まあ文字や文章は流石に遅いから、それは僕が教えるでしょう」

「いいんですか！？」

目を輝かせるルカ。彼女は余程勉強したいものと見えて、リースも感心するのだった。

それからというもの、ルカの忙しくも充実した日々が始まった。

「行ってきます！」

かつて断念した学校に再び通うことができる。当たり前のように通う者には奇怪にさえ思えることだろう。それでも、ルカにとっては最高の喜びだった。

「ただいま帰りました！」

元々勤勉で素直な性格のルカ。数日が経てば、学校と家業の両立に然したる時間は必要としなかった。カルディやファクトが話を聞け

ば友人もできたというし、帰宅後は合間を縫ってリーズにも教えを請うているらしい。例えば彼自身が言っていた文字の問題や、その日習ってきたことの復習など。

そんなある日、ルカはとんでもない種目の相手をリーズに頼んだのだ。

「剣術!? 最近はそんなものまで習うのか!?!」

「はい。なんでも、護身術の一環だそうです」

リーズは小さく顎を抱え、不思議そうに唸り少し考える。そして仕方ないと頷き、言った。

「よし、わかった。相手をしよう。練習用の剣を持ってくるから、玄関を出たあたりで待っておいでくれ」

「はい!」

部屋を出て、いかにも楽しそうに玄関に向かうルカ。リーズは廊下の奥の倉庫へ入り、二振りの模造刀を取り出した。

「まさかこれを使う日が……もう無いと思っていたがな」

本物の剣とも見紛うほどに出来が良い、少し小さめの模造刀。鞘からすらりと抜き放ち、その刀身を眺めた。

「……………久しくお会いしていないな」

フツと笑い、再び剣を収める。剣を手に立ち上がり、ルカの待つ庭へ向かった。

「おや、リーズ様。剣の練習でもなさるのですか?」

「僕じゃなく、ルカが練習を頼んできたんです。少々付き合ってくださいよ」

「ほう。それは面白そうですね。いつてらっしゃいますか?」

ぺこりと頭を下げるファクト。彼の言葉の端を、リーズはすぐに読み取った。

「気になるようですし、ファクトさんも見に来ますか?」

「よろしいのですか? では、是非とも」

小走りになってリーズの後ろを追いかけるファクト。実は興味があったのが丸見えで、リーズもそんな彼をおかしく思いながら玄関を

出た。

「あっ、待つてましたよー」

ニコツと微笑むルカ。模造刀を手渡すと、鞘に入ったままのそれをじっと眺めていた。

「学校のものより……数十倍豪華に見えます……」

「それはそうだろう。修了の証に、師匠に貰ったものだからな」

「修了!? 師匠!?!」

リーズの言葉にルカがはっと驚く。自分と同じ素人レベル、そうではなくてもせいぜい少し上手いぐらいだと思っていたからだ。

「大丈夫だ。練習に付き合うわけだから、相応に手は抜かせてもらう」

「そ、そうですね。お手柔らかにお願いします」

こうして、ルカの剣術の練習が始まった。

「あら?」

もう一人、剣と剣とがぶつかり合う音に気付いて出てくる。カルディである。

「ファクト、二人は一体どうしたの?」

「おお、カルディ様。ルカの剣の練習ということですよ。興味本位で見えておりますが、二人ともなかなか剣筋が上手ですよ」

「へえ、なかなか面白そうね」

ファクトと一緒にあって二人の練習を眺めるカルディ。その途中で、彼女はあつことに気付いた。

「あの剣、それにあの動き、もしかして……いえ、まさかね」

同等程度の力で練習に付き合っていたリーズだが、ちょっとした悪戯心を出したらしく、決め手となる一撃を出した。その一撃に、カルディは見覚えがあつたのだ。

「きゃっ! リーズさん、酷いですよお」

「はは、すまない。ちょっと負けん気が出てしまったというかつい、な」

すっと伸ばされたリーズの手を取り、立ち上がるルカ。二人が再び

練習用の模造刀を構え直すと、そこに横からの一声が入った。

「待ちなさい！ ルカ、交代よ」

「へ？」

リーズとルカが同時に振り返る。その先にいたのはカルディだった。「カルディ様、私の練習ということで付き合ってもらってるんですよ？」

「ごめんね、ルカ。練習なら後で私も付き合うから、ひとまず剣を貸してくれる？」

「はい！」

練習の約束を取り付けると、意外にもルカはあっさりと剣を渡した。だが、不可解そうな表情をしたのはリーズのほうである。

「どうして君が出てくるのかな。僕はルカの練習に付き合うという約束があつたわけだが」

「いいじゃない、本人も許可してるんだし。そうね、それなら私の練習にも付き合つてよ」

溜息をつきながらも、リーズは構えた。小手調べとばかりに、わざと隙を作っている。

「てあッ！！」  
対するカルディも剣を握り、構えた。二人の動きがぴたつと固まる。

先に振り出したのはリーズのほうだった。当然カルディはそれを避け、リーズもすぐに体勢を立て直す。

「形があるんでしょ？ 見せてよ」  
「なぜそれを」

驚きながらも、剣をくるりと回して眼前に構え、気を込めるような特殊な姿勢を作る。カルディも剣を縦にし、防御の姿勢を取る。

次の瞬間、リーズが飛び出した。

突進と同時に剣が引き抜かれ、その剣がカルディの剣にぶつかる。

キーンという音がして、二人は一步後方へ飛び去った。

「形に見せかけた、ただの攻撃だ。動じないところを見ると……」

「だって、私もさっきの型を知っているもの」

言いつつ、剣を鞘に収める。それを確認して、リーズも同様に剣を収めた。

「だからそれはどういうことだ」

「さあ。私もわからないわ。でも同じ型を知っているってことは、同じものを習ったって考えるのが普通かしら」

「……君の師匠の名を言ってみてくれ」

「ドルトーよ」

その名を聞いて、リーズは苦笑した。もしかしたらという予想は大当たりし、やはりカルデイと同門であることがわかったのだ。

「つまり君もドルトー先生の下で学んでいたのか。いつ頃だったんだ？」

「随分昔。まだ八歳前後だったわ。剣術も必要だからって学ばさせられたの」

「そうか……なら、少し時期が違ったのかもしれないな……」

片手で軽く顎を抱え、かつての剣の師匠のことを考える。思えば数年間まるで会っていなかったのだ。久しぶりに会いたい、そんな気持ちが入かんできている。

「ねえ。ドルトー先生に会いに行ってみない？」

「先生に？　だが僕は……」

ドルトーというのは、一時期剣術師範として名を馳せた男だった。

彼は自らの信条からか学校は持たずに、出張してマンツーマンで指導するスタイルを取っていた。それ故に彼がどこから来ているか、何を本業としているかなどは殆ど知る者はいなかった。リーズが懸念しているのもそこなのである。

「僕は、ドルトー先生がどこにいるかまるで知らない」

「それなら大丈夫よ。昔、何気なく聞き出したことがあったもの」

「な、なんだって!？」

ドルトーは、昔から自らを語ることはしなかった。それは有名な話だったが、逆にそれらの質問に容易に答えてもらった者も少数いるという。彼が自己に関する情報を教えたり教えなかつたりする意図

は誰にも理解できないが、彼の性格を考えると思い浮かぶ答えは、意外と単純な理由。

「ドルトー先生は何をするにも気分屋だったからな。今回の事例もそうかもしれない」

リーズは考えた。行くべきか、行かぬべきか。そして考えているうちに選択肢は変わり、行きたいか、行きたくないかの二択になった。答えは、既に決まっていた。

「そうだな。久々に先生に会いたい」

「決まりね」

にこつと笑うカルディ。リーズも小さく溜息をつき、それからフツと笑った。

「そうなるよ、この家の管理はどうしたものかな」

「それならファクトに任せておけば大丈夫よ。ファクトは昔から何度も留守を預かっていたわ。問題なくこなしていたし、ルカもいるから尚更安心よ」

二人は目を見合わせて頷き、二人の様子をじっと見守っていたカルディとリーズの下へ歩いていった。もちろん、今話した件を告げるためだ。

「旅ですか。ええ、構いません。私は主人の留守を守るのみです」  
ファクトは流石に慣れた対応のようで、かたやルカはというところ……

「ええっ!?! い、嫌です! 私も連れて行ってください!!」  
遠くへ出向くことが楽しみなのか、もしくは剣に興味を持ち始めた故なのか、ルカは抗議した。だが、彼女とて自らの足枷を忘れていくわけではない。

「気持ちはわかるがルカ、君は学校に通わなければならないだろう?」

「う……」

しまったとばかりに顔を背けるルカ。しかし反論はしない。そこにカルディがとどめとも取れるフォローを入れた。

「貴女が残ってくれたら安心なのよ。お願い、ここでファクトを手

伝ってあげて頂戴」

ルカの手をきゅっと握り、目を合わせて語りかける。ルカはすぐに陥落した。

「わかりました……その代わりに、戻ったら私にも剣術を教えてください  
さい」

「そうね。先生に指南書でも書いてもらおう」

こうしてルカは渋々納得し、その翌朝、二人を送り出したのだった。  
「誰でも昔の知人に会うのは嬉しいもの。私達はお二人がいつでも  
帰ってこれるように、万全の体制でこの家をお守りしましょう」

「……はい」

リースとカルディの乗った馬車を見送った二人。くるりと踵を返し、  
屋敷へ戻った。

## 5話 - 昔の剣今も刀（後書き）

投稿はあっさり落ちたようで、しばらく小説を書くことができませんでした。精神的な問題で。

自分程度のレベルが通用しないことはわかっていただけけれど、いざ簡単に振り落とされるとやっぱりね……

それからはパソコンの故障、生活の都合と重なり全く書けておりませんでした

するとなんと、お気に入り登録数が一件減っているではありませんか！

当然ですね、二ヶ月も書いてないと見限られますよねorz

ですがごめんなさい。実は一月一杯忙しく、また書けるのは二月からになると思います。どうか見捨てずに待っていただければありがたいです……

最近新作の構想がいくつかあります。初めての短編も一つ思い浮かんでいます。

既に抱えているいくつかの作品は放りっぱなし。しかし折角浮かんだ構想を無視して進めるのも勿体無い。

自分としては新作構想のストーリーを出して様子を見てみたい感じですが、中途作品を乱立しまくって大丈夫なものでしょうか。

投稿を目的としてここに作品を登録していますので、その目的からいえばいろいろな作品を書いてみるべきといえます。

しかしそれでは、各作品を読んでくださっている方には残念極まりないというもの。

お気に入り登録数が示す通り、楽しみにしてくださっている方も少数ながらおられます。

その方々はどう思われるでしょうか。意見が聞けないだけに、気に

なるところです。

周囲の友人からも感想を頂けなくなっているので、何もご意見がなければ独断で突っ走るかもしれせん。

それでは、長々と失礼致しました。時間がかかりますが必ず戻ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3759i/>

---

代！天！楽

2010年10月15日23時25分発行